

H25 年度 合同・訪問ヒアリングの結果について

実施概要

仙台市障害者保健福祉計画（平成 24 年度から 29 年度）に係る監視等実施方針（平成 25 年 10 月 8 日仙台市障害者施策推進協議会決定）に基づき、調査（合同・訪問ヒアリング）を下記のとおり実施した。

記

障害者施策推進協議会委員延べ 34 名が参加し、以下のとおりヒアリングを実施。

(1) 合同ヒアリング

□日時・人数：平成 26 年 1 月 29 日（水）・30 日（木） 18：00～20：00

対象者 15 名、協議会委員延べ 15 名、市職員 6 名

【当事者】 身体 1 名、知的 2 名、精神 1 名、高次脳 1 名

【家族】 身体 1 名、知的 2 名、精神 1 名、高次脳 1 名

【支援者】 身体 1 名、知的 2 名、精神 1 名、高次脳 1 名

□場所：仙台市役所本庁舎 8 階ホール

(2) 事業所等訪問ヒアリング

□日時：平成 26 年 1 月 17 日（金）～28 日（火）、1 か所当たり 2 時間程度

□実施か所・人数：12 か所、対象者 32 名、協議会委員延べ 19 名、市職員延べ 24 名

【放課後等デイサービス（発達） 家族】 3 名

【特別支援学校（身体） 教師】 4 名

【一般雇用 事業主・職員】 2 名

【障害福祉サービス（就労移行支援） 当事者】 高次脳 2 名・知的 2 名

【障害福祉サービス（グループホーム） 当事者】 精神 3 名

【障害福祉サービス（ケアホーム） 当事者】 身体 2 名

【在宅で生活する障害者（高次脳・難病） 家族】 1 名

【入所施設（自閉症） 職員】 1 名

【当事者団体（発達） 当事者】 3 名

【ひきこもり支援センター 利用者・家族】 6 名

【介護タクシー 事業主】 1 名

【商店街 事業主】 2 名

項目一覧

1. 住まい
2. 家族

3. 友人・仲間
4. 日中活動
5. 就労
6. 余暇・社会活動
7. 学校生活
8. 放課後
9. 地域とのつながり
10. 地域生活への移行
11. 保健福祉医療
12. 災害・防災
13. 障害理解・差別

ヒアリングにおける意見等要旨

1 住まい

グループホーム（以下 GH）・ケアホーム（以下 CH）

- 将来家族が対応できなくなった場合に備えた、GH、ケアホーム CH の充実を望む。
- 高次脳機能障害の方から、高次脳機能障害の方が住みやすい GH（個人を尊重した施設）を望む。
- 資金・物件・受け入れ地域・職員の確保・NPO 立上げのノウハウが課題である。
- GH を利用している精神障害の方から、プライバシーが守られていて良い。知的障害の方から、ボランティア活動をしており門限が不便なのでアパートを借りたい。
- CH を利用をしている身体障害の方から、タイムスケジュールの縛りが無い・トイレや流しが各部屋についているなど独立性・自由度が高くて良い。高齢になった時を見据え、身近なところにこのような施設が増えれば、住まいの場の選択枝が広がる。

その他

- 在宅の障害者（高次脳・難病）の家族から、以前は、バリアフリーでない共同住宅に住んでおり、車いすで自由に動けなかった。最近、バリアフリー・ひろびろトイレの家を新築した。

【見えてきた課題等】

- ・ 住まいの場について、必要な量の確保と質的な充実の必要性
- ・ 障害のある方の高齢化に伴う住まいの場について、選択枝の拡大の必要性

2 家族

- 親が高齢化し介護の負担の増加。親が障害・病気になり、障害のある子による親の介護。家族が障害のある子と認知症の親を同時に介護するといった問題が生じている。
- 発達障害の方から、親亡きあとの経済面について不安（親の年金で家計が維持されている）がある。
- 当事者から、家族が障害を理解してくれない、時間がかかる。家族から、家族として障害を受容するのに数年かかった。兄に障害があることを妹が恥ずかしくないよう、

妹を兄が通う特別支援学校の行事に連れて行っている。兄妹関係への気遣いは、家族の大きなテーマである。

- 精神障害の家族から、**家族会に対するニーズが高い**ことから、家族会の中で相談員を育てる研修会を開く必要がある。高次脳機能障害の家族から、本人が葛藤を抱え、それを家族に暴言等でぶつけるため家族が苦しんでいる。ピアカウンセリングが重要。ニーズに応じ家族会を細分化（父親の会、妻の会、子供の会など）する必要性。一方で、支援者から、家族側の障害者と認めたくないという思い、年齢・症状の多様性により、家族会が一枚岩になれない。

【見えてきた課題等】

- ・ 家族の高齢化に伴う介護負担軽減や親亡きあとの不安解消に向けた取り組み
- ・ 家族の障害理解促進などのため、家庭や家族会活動に対する支援の充実

3 友人・仲間

- 高次脳機能障害の方から、その特性上新たな人間関係を作れない。
- ひきこもり支援センター利用者から、現状を尋ねられるのが嫌で親戚・友人に会いにくい。会いにくくしているのは自分自身の問題と感じている。
- 発達障害の方から、**地域活動推進センターの活動で知り合った何人かとつながりを持っている**。相談支援機関で知り合った仲間と一緒に話し合っ当事者活動のグループを立ち上げ、講演会等の手伝いもさせてもらっている。

【見えてきた課題等】

- ・ 当事者活動などを通し、ニーズに応じた仲間づくりの場や機会を増やしていくことの重要性

4 日中活動

- ひきこもり支援センター職員から、身体障害者の移動支援のボランティアに行くことで、人の役に立てると**いう気持ち**を持っている。
- 精神障害の方から、老人ホームで認知症の方の支援をしており、障害があってもできることをやっていくべき。ケアホームを利用している身体障害の方から、働ける人はできる範囲で働く、役所の手続きもできるだけ自分ですることで、**生きている気持ち**になれる。
- 入所施設（自閉症）職員から、支援のポイントとして、できないところはサポートするが、少しでもできるところは、**自分でできるように配慮**している。
- 障害者福祉センターを利用している身体障害の方からは、**自立訓練で人と会話することが楽しい**。家族・支援者から、身体障害の方の生活介護事業所が少なく、1年半の支援終了後の日中活動の場の確保が不安である。
- 自閉症の家族から、**通所施設利用の際の送迎が高齢化した親の負担**となっている。

【見えてきた課題等】

- ・ 本人のQOLの向上やエンパワメントにおける日中活動の充実の重要性
- ・ 障害のある方が利用しやすく家族負担の軽減を図る日中活動の場の整備等

5 就労

- 入所施設（自閉症）職員から、自閉症の方はコミュニケーションでつまずき、失敗体験はぜったいに忘れないため、小さいころからスキルやコミュニケーション、日常生活のトレーニングをしないと、就労に結びつかない。
- やりがいについて、知的障害のある方から、少額でも働いて給料をもらうことがいい刺激になる、年金とは違って**自分で稼いだお金なので達成感がある**。
- 身体障害の支援者から、和式トイレなど**ハード面が整備されていない**。通勤についても、電車やバスは毎回交通局に電話をしなければならない。
- 視覚支援学校教師から、視覚障害者は就労を断られることが多い。障害者雇用で採用されたが実際には仕事が無く支援学校へ入学した例もある。
- 発達障害の方から、現在は障害者雇用だが、**給料が安く両親と同居しないと生活が成り立たない**。一般就労では**周囲とのコミュニケーション**がうまくいかず続かない。
- 障害者雇用の推進について、一般雇用主から、行政が中心になり、民間企業の総務部や現場担当者に障害者施設で働いてもらい、**障害者が働ける姿を見てもらう**。助成金などのメリットを伝えていく。障害者に合わせた作業内容の構築を提案するジョブコーチを配置する。**定着のために、主治医**（薬を替えたときは不安定になるため、事業者は、医師から情報が欲しい）・**家族**(当事者の体調が崩れても、家族と連絡が取れれば対応できる)**と連携**している。
- **ジョブコーチの活用**について、高次脳機能障害の家族から、個人情報扱う場合や厨房等衛生上外部の人を入れたくないという場合にジョブコーチを会社に断られることもある。企業に入ると障害者が声を上げづらくなってしまう。障害者雇用をした企業には必ずジョブコーチを入れてほしい。
- **職場での配慮・理解・働きやすい職場作り**について、高次脳機能障害の方から、外見では障害のことが分からないので、何に配慮が必要なのか分かってもらえない。職場で全員に知ってもらうことは難しい。社員が異動した場合、再度関係を築いていかなければならない。単に障害者を雇用するのではなく、会社としてマニュアル化を図り、**働きやすい職場にしてほしい**。発達障害の方から、苦手とすることを言葉でうまく伝えられない時にメモなどで伝えられればいい。

【見えてきた課題等】

- ・ 本人のQOLの向上やエンパワメントにおける就労の重要性
- ・ 賃金向上に向けた取組みの必要性
- ・ 障害のある方が働きやすく通勤しやすいハード面を含めた就労の場の整備等
- ・ 就労の場における障害理解の一層の促進

6 余暇・社会活動

- GHを利用している精神障害の方から、生活保護を受けており、節約のため外にあまり出ず、家でテレビを見て過ごすことが多い。当事者団体（発達）の方からは、サイクリング・野球観戦・飲み会・旅行・インターネット・読書等趣味を楽しんでいる。
- 高次脳機能障害の方から、シルバーセンターの健康教室に月1回通っており、**予定が**

あるだけで張り合いになる。

- 当事者団体（発達）の方から、アーチルでは、はじめ一方的に相談するだけの関係だったが、次第に、経験を活かして講演会の手伝いなどで関わるようになり、徐々に支援者とのパートナー関係が強くなってきている。自分たちとしても、今後の展開について考えていく。

【見えてきた課題等】

- ・ 本人のQOLの向上やエンパワメントにおける余暇活動や当事者活動等の重要性

7 学校生活

- 視覚支援学校教師から、本県の弱視学級はインクルーシブ教育が進んでおり、支援学校に入学する子供が少なく個別対応ができています。ただし、教師もわからない事が多いため、支援学校が地域の学校を訪問し入学時の環境整備等を行っている。このような外部支援と、重複の生徒が多いことで本校も教師の数が足りない。
- 発達障害児の状況として、普通学級の保護者から、児童それぞれの個性を認め尊重するソーシャルスキルを身に付ける指導が欲しい。
特別支援学級について、児童数名に担任が1人のため手が足りず、個別対応ができない。毎年のように担任が変わるため、教師も子供も混乱する。学校・放課後デイサービス・相談支援との連携も引き継がれていない。口頭だけでなく統一された様式の引継ぎ書類があれば良い。
特別支援学校について、転校する前に特別支援学級の様子を見に来てくれ、スムーズに移行できるよう働きかけてくれた。学校側が関わり方を少し変えるだけで、出来るようになった。引継ぎもしっかりしており、中学部への進学も心配していない。
- 進路については、視覚支援学校教師から、重複の生徒は進路先として社会福祉施設に移行していくが、視覚障害がある事で施設側の理解が得られないことが多い。事前に施設の実習を行い受け入れてもらっている。障害福祉サービス事業所（知的）の職員からは、毎年近くの支援学校から実習を経て入ってくるが、すぐ定員いっぱいになってしまい、増築をしても追いつかない。
- 送迎について、視覚支援学校教師から、小学生や重複障害の生徒はほとんど全員親の送迎。車だけでなく公共交通機関での送迎もあり、親の負担が大きい。

【見えてきた課題等】

- ・ 教育環境の充実
- ・ 関係機関の連携などによるライフステージの変化や生活状況等に応じたきめ細かな支援の重要性

8 放課後

- 視覚支援学校教師から、視覚障害のある児童が利用しやすい放課後等デイサービスやレスパイトが少ない。
- 放課後等デイサービス（発達）の家族から、スタッフが他の子との間に入って来て関わりを持てるようにしてくれている。企画力が高く、楽しく、達成感を持てるよう

にしてくれている。放課後等デイサービスを利用しないときは、近所に友達もいないので自宅で家族と過ごしている。学校以外で友達を作れる、手帳が無くても利用できる場が増えてほしい。

【見えてきた課題等】

- ・障害特性に応じたサービス提供ができる放課後の居場所づくり
- ・障害の有無に関わらない放課後の居場所づくり

9 地域とのつながり

- 発達障害児の家族から、近所の人は、発達障害について知識がないだろうから、近所の人に助けを求めようというイメージはない。親が病気や怪我をしたときは、ショートステイやレスパイトの利用を考えている。
- 施設の開設について、ひきこもり支援センター職員から、施設を作る1年前から町内会の役員会に参加して理解してもらうよう努めた。入所施設（自閉症）職員から、開設前に近隣の反対に合い、開設後も利用者が迷惑をかけるたびに説明を行い理解を得てきた。現在も、屋外活動で職員や利用者があいさつを続けている。

【見えてきた課題等】

- ・障害のある方や家族が地域で孤立感を感じることの無いよう、市民に対する一層の障害理解の促進

10 地域生活への移行

- CHを利用している身体障害の方から、震災で実家が流され、仮設住宅にいる家族のもとに戻る考えは無い。いくら住宅改造したとしても自宅には戻れない。現在は、核家族化が進んでおり、自宅を改修して家族が介護しても、いずれは老老介護になる。今いるような施設が増えれば良い。
- 入所施設（自閉症）職員から、重度の知的障害に自閉症やてんかんを持っているため、行動障害も多く、地域移行は難しい。入所施設は、空きもなく、待機者も多い。親の年齢も高くなり、切羽詰まった家族も多いので、行政は在宅で困っている人の対応を検討してほしい。もう少し入所の枠があってもいい。
- 自閉症の家族から、地域から施設に大きな声を出さないように苦情があり、地域側でも配慮してほしい。精神障害の家族から、障害者施設を新たに建てる場合、地元にも必ず反対する人がいる。
- 商店街事業主から、アパートや借家よりGHのほうがよいのでは。コミュニケーションの積み重ねや理解が大切。昔は、障害者が近所にいるなど目にするのがあったが、最近は接する機会がない。徘徊など外に出ることが制限されるような施設が地域にできると心配。小さい頃から障害者と接する機会がないと、障害者の受け入れは難しい。
- CHを利用している身体障害の方から、地域移行には、ボランティア、ヘルパー、移動手段（自動車）、友人や地域との関わりが必要。
- 一般雇用主から、地域の理解が進んでも、当事者の生活力（所得・仕事の保障）が整わないと地域移行は進まない。そのためにも障害者の雇用促進が大事である。

【見えてきた課題等】

- ・ 地域生活の継続や移行における障害特性，年齢，所得，家庭の状況などを踏まえた一人ひとりのニーズに基づいた支援体制の整備
- ・ 地域レベルでの一層の障害理解の促進

1 1 保健福祉医療

福祉

- 相談支援について、知的障害の家族から相談事業所ごとに得手不得手があり、使いづらい。相談支援事業所からは計画相談での目標数クリアが課題である。
- 自閉症の家族からは、重度・行動障害の方は**行動援護・レスパイト**等を受け入れてもらえないことが多く、家族もどうせ断られるからと抱え込んでしまい、**重度の人ほど家族の負担が大きい**。また、在宅の障害者（高次脳・難病）の家族からも**ショートステイは受け入れ事業所がないから考えてない**。知的障害者の家族から、児童のときは放課後デイサービスに預けられていたが、通所施設に行くようになってからは、**その後**に預けられる施設がない。身体介助で同性介助が必要だが、**男性ヘルパーが少ない**。
- 精神障害のある方から、生活保護の申請に行ったが、一人で行った時と支援者と一緒に行った時とで役所の説明が異なり、嫌気がさして申請をあきらめた。知的障害のある方から、**保護課と障害高齢課の連携**がうまくいっていない。
- 移動について、CH を利用している身体障害の方から、予約しなくても乗れる福祉タクシーがあれば良い。料金を安くしてほしい。介護タクシー事業主から、料金を下げ、いつでもどこでも手を挙げればタクシーに乗れるのが理想。そのために、ドライバーの経験・技術向上、自社以外のドライバーも対応できるようになることが必要。仙台市にドライバーの教育を支援してほしい。

医療

- 発達障害児の家族から、小児科医が**障害の理解があり**、外科についても病院を紹介してくれる。入所施設（自閉症）職員からも、地域の第一医療機関では親切に対応してもらっている。
- 精神障害者の家族から、精神科だけのところは、身体的なチェックがないようだ。自閉症の家族から、障害者が**気軽に行ける病院**が欲しい（例 愛知県では、心身障害者コロニーに内科、眼科、皮膚科全てがそろっていた。仙台では、歯医者は福祉プラザにあるが、眼科や耳鼻科はない。）

連携

- 精神障害の方から、同じ精神障害者でも、うつの人、パニック症の人など当事者同士が、否定しあっていることがある。精神障害者の家族から、障害者制度は種別ごとに縦割りで、**横のネットワークがほとんどない**。自閉症の家族から、行動障害のある方が薬を服用しているが、薬の量・時間帯などで家族・病院・施設の連携がうまくできていないことが多い。
- 精神障害者の支援者からは、法人内の事業所間の連携により制度と制度の隙間はある程度解消できると考える。自閉症の支援者からは、施設は日中活動の支援が主だが、

家族・住環境・通院先など全体像を把握しておかないといけない。施設・嘱託医・かかりつけ医が連携している。高次脳機能障害の家族から、家族の心情として周囲に障害のことを知られたくないため、必要などころにつながらない。ネットワークを深めて、専門家やボランティアの協力を得ていきたい。

【見えてきた課題等】

- ・障害のある方がサービスを利用しやすくなるよう相談支援体制の強化などサービス提供基盤の整備等
- ・障害のある方に対応できる医療機関の必要性
- ・保健、福祉、医療など関係機関のネットワークの強化
- ・地域レベルでの一層の障害理解の促進

12 災害・防災

地域とのつながり

- 在宅の障害者（高次脳・難病）の家族から、震災時賃貸マンションに住んでいたが、地震の際、民生委員、区役所、地域の方から何の連絡もなかった。一方、知的障害者の家族から、普段から町内の総会・災害時要支援者の集まりに参加し、民生委員とも連絡を取っていたところ、震災時も周りから声掛けがあった。
- 入所施設（自閉症）の職員からは、入所者は、睡眠剤を使用する者が多く、夜に何かあったら起きられず、職員だけでは対応できない。そのためにも、地域の方との協力体制が必要である。

情報・避難所

- 視覚支援学校教師から、福祉避難所開設の情報が視覚障害者に届いてなかった。視覚障害者に特化した情報を持っていても視覚障害者に伝える方法がない。手帳交付段階でどのようなサービスが受けられるか案内が欲しい。
- 発達障害児の家族から、地域で情報を得られる場所や、障害者が安心して避難できる場が必要である。いろいろな障害を理解してくれるスタッフがいるとよい。

その他

- 入所施設（自閉症）の職員から、消防署立会いの防災訓練時に、利用者の特性を消防署の方に理解してもらっている。災害時に、地域にちらばっている障害者や、通所利用者・GH利用者などは、孤立し、支援が行き届かないこともあり、入所施設など大きな施設で受け入れ、そこで行政支援をもらえるような体制が必要である。

【見えてきた課題等】

- ・災害時要援護者登録の一層の申請勧奨
- ・日頃からの地域との関わりの重要性
- ・災害時に障害のある方がわかりやすい情報提供や過ごしやすい避難場所の必要性
- ・地域レベルでの一層の障害理解の促進

13 障害理解・差別

差別と感じた事例

- CH を利用している身体障害の方から、車いすに乗っていると手を挙げてもタクシーに気付いてもらえないことがある、乗車拒否させないのが大事との声有り。
- 発達障害児の家族から、市の職員から配慮を欠いた発言をされたことがあり、言葉を選んで使うべき。医師に障害のことを伝えたくて受診したが、ため息をつかれ、差別だと感じた。
- 発達障害のある方から、職場で、他の人より仕事が遅く、コミュニケーションがとれず、からかわれたり、見た目を馬鹿にされた。「何でこんなことも分からないのか」と言われたり、人前で差別的なことを言われた。発達障害のことを言いたくなくて伝えなかったせいか、仕事を与えてもらえないこともあった。
- 入所施設（自閉症）職員から、救急搬送の際に、騒いだりすることもある旨伝えたら、病院から断られた。職員が説明しようとしてもその前に断られる。
- GH を利用している精神障害の方から、近所の方から馬鹿にされた。市職員が窓口で統合失調症の人に対して笑っていた。作業所のスタッフが利用者を平等に扱っていない。ただし、空気を壊したくないから言えない。
- 自閉症の家族から、公的機関での合同面接会（ふれあいワークフェア）で、「てんかんの方は受け入れない」と言われたことがある。
- 在宅の障害者（高次脳・難病）の家族から、デイサービスに行ったことがあるが、高次脳機能障害により大声を出すことがあり、やんわりと断られた。

障害理解の状況

- 商店街事業主から、身体・知的・精神障害など耳にはするが、それぞれ法律があったことは知らない。障害者の実態があまり分からない、差別も見たことがない。
- 知的障害の方から、部屋を借りるとき障害者への理解が足りない。
- ひきこもり支援センター家族から、周囲から「なぜ（家にいるの？）」と思われていることが気になった。子どもの状態を理解してくれる人がいると気持ちが楽になる。
- 視覚支援学校教師から、全盲の方（特に中途失明の方）ですら近所では白杖を使わない例もある。ホームルームで指導をしたが自分の障害を周りに話すことを嫌がる子供が多い。市バス・地下鉄で、視覚障害であることを他の乗客・運転手に理解してもらえず、白杖を持たせて視覚障害者であることを理解してもらった。
- 高次脳機能障害の方から、役所で手続きを覚えてもらうためには、病気をきちんと説明する必要があるが、伏せておきたいこともあるので難しい。
- 高次脳機能障害の家族から、高次脳機能障害の説明が難しいので、他の人に伝えづらい。

配慮や支援

- 視覚支援学校教師から、研修で、生徒は一人一人見え方が異なるため個々の生徒の見え方への配慮を伝えている。見え方の違いについて、いかに一般に知ってもらうかがポイントである。

- 発達障害児の家族から、特別扱いしてほしいのではなく、適切な行動をさせるためには、どのような支援が必要か考えてほしい。
- 発達障害のある方から、悩んでいる方向性は人それぞれ（コミュニケーションの問題、就労の問題など）なので、一人ひとりに対応したメニューがあればいい。
- 高次脳機能障害の方から、どうしたらバスや電車にスムーズに乗れるのか、だれに聞けばいいのかわからない。運転手や窓口も説明がバラバラで困る。
- 発達障害の方から、気軽に相談できるホットラインがあればいい。嫌がらせの内容が名誉棄損になるかどうか、法律・家族の介護などトータルで相談できるワンストップの窓口があればいい。
- CH を利用している身体障害の方から、タクシー運転手はヘルパー資格を持っている人が多い。JR やバスなどいろいろな職場の方が、高齢者・障害者支援、ヘルパーなどの研修受ければいい。
- 高次脳機能障害の家族、入所施設（自閉症）職員から、差別解消には、市民への理解を広めることが大事である。
- 精神障害の方・高次脳機能障害の方から、障害の認知度アップのため、自分の経験談を伝えていくことが大事。家族に理解してもらうために自分がしたこと、本人の生き辛さや家族に理解されないことの悲しさなどをできるだけたくさんの方が語れるといい。
- 商店街事業主から、障害の理解を深める取り組みについて事業所単位で取組むのは難しいが、街づくりで接点を多くしてコミュニケーションを取ることはできる。障害者と社会とのパイプを太くすることに貢献するイベントを企画したところ、参加店が協力してくれ、実行委員長として驚いた。参加店が受け入れてくれた要因は、店に負担がかからず、慣れている障害福祉サービス事業所が間に入ってくれ安心できたからであり、継続できたらいい。

その他

- 高次脳機能障害の家族から、障害者に対する差別は一昔よりは良くなっているように感じるが、家族でもどこからどこまでが差別なのかが分からない。
- 一般雇用主から、差別解消法ができたことはよいが、障害者に対して何も言えないような法律になっている。構えてしまわないように接していくことが大切。食品を扱う事業のため手洗い・品質管理は障害のあるなしに関係なく指導していく。マナーはマナーとして教えていく。
- 介護タクシー事業主からも、障害者の中には、車内で喫煙するなどルールを守らない人も多く、人としてルールを守ってもらいたい。

【見えてきた課題等】

- ・ 市民レベルにおける障害理解の広がりや深まりの必要性
- ・ (仮称) 障害者の自立と社会参加を支援する条例に向けた取組み